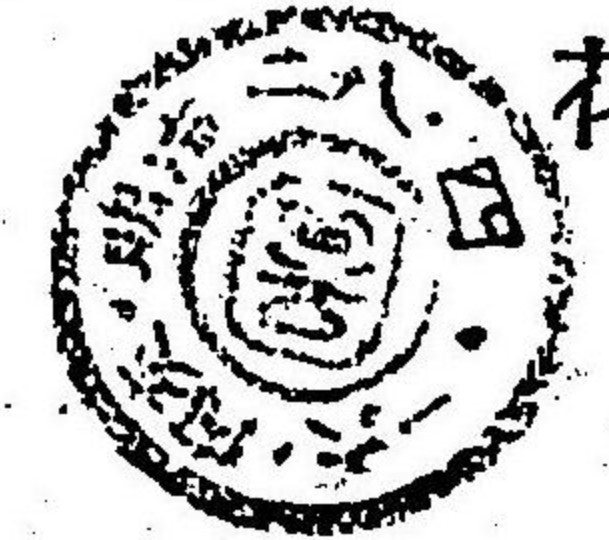


「愛の杯」をよみて

残

花

神のめぐみを	あたまにかふる	わらべのくめる	のもてる	君と國とに	その身をまもる	ますらたけをが	ますらたけをが
おかつなり	ためならず	ましみずは	さかづきは	つくすのみ	ためならず	とるつゝも	もつ太刀も



やよやをさなご  
はるののやまの  
あきののもせの  
神のめぐみの

やよやちご  
梅さくら  
はぎ桔梗  
にほふなり

四

なれもめぐみを  
あいのさかづき  
ことばとわざの  
あふるゝまでに

うけしみを  
てにとりて  
ましみずを  
くみてゆけ



序

此書校僚佐藤女史の譯出せるもの受て讀下するに天使に似たる一少年が一ケの小盃をもて、丈夫が心膽を感激せしむるさま、覺えず同情の涙滴々として紙上に濺ぐにいたる。女史譯文拙しとなし、上梓を憚る、余強て之を勸説し、終に此書を以て無害統良の短篇となし、普ねく、家庭日曜日學校等の讀物に推薦するにいたれり。

明治廿六年四月下旬

星野光多

愛の杯

今は昔の事なれど或遠國に一人の童子ありけり。或日この童は小き手を額に翳し人跡は絶へしと思はるゝ、遠山本の嶮しき路をながめ居たり童の後には草の青々と生ひ茂り其草深き處に一つの小屋の立てるあり、一目していと貧しく寂しき住家とは知られたり、されど何となく満足して世を渡るさまも忍ばれて和氣のみてる有様なり童は暫く居りて小屋に走せ歸り手のとゞくあたりに懸りたるブリツキ製の蓋ある水器と釘に懸りたる布巾を取り嶮しき岩間をば泉の流るゝ邊に走り行き冷き清

水を汲み取りぬ。此日は暑氣殊に酷しくまして日中のと  
なりければ水器の蓋の上に布巾を蔽ひ、ユツプを腰には  
さみ急ぎにくくして山路へと登り始しが其時童の熱心は  
小き紅顔に溢れいでたり。此童はもとより荒き山家に住  
み馴れたれば危険なる山坂の上り下りなど飽まで心得  
たり程なく無難に望みの場所に達したり。折しも一人の  
旅人の其處に来るあり如何にせしか馬より下りて其場  
に斃れたり、暑き日の長旅にいたく弱はり果たるならぬ、  
其風采何となく凡俗さまにあらず見られぬ。かゝる時に  
は如何にして善からん幼きものゝ事としてその水器とユ

ツプを地上に置きたるまゝ暫しは爲すべき様を知らざ  
りしが、やがて水器の蓋をとりて旅人の側に近寄り、その  
小き手をソツト旅人の頭の下に差し入れ言葉をかけぬ、  
「モシ、モシ、伯父さん氣を慥かにして下さい今日はこんな  
に熱つい日ですから、喉咽が渴ひたてしやうどうぞ氣を  
慥かにもつて下さい、時に旅人は何事か物云ひつゝ、少し  
身軀を動かさし、徐かに目を開きけるが、思ひきや己が上に  
小き童がのりかゝり居たり、又その口の側には彼が幾時  
間渴望せし冷たき清水の溢るゝばかりユツプに入れて  
差し出さるゝを見、グツト一口に飲み乾したりしが、始め

て蘇生せし心地して起き上り傍に倒れし古木の根に寄りかゝりて息ひたり。旅人は童に向ひ「これお前さんは、どんな慈悲深い天の使に遣はされて、わたしの所へ来て下さつた、わたしの来た路には、人も獸も往來せることなき様なりしが、わたしは行く路に迷てしまひ、何處へも出る事が出来ず、只ぼんやり霧の中に彷徨ふ如くなりしが、お前さんはどうしてわたしが渴いたり勞れたりして居る事を知られしか、わたしは今迄この様な甘い水を飲んだ事は無い、又お前さんの顔を見た時の様に嬉しかつたことは無い、どうぞもう一杯水を飲せて下さい、其ユツプを

見るだけでも涼しくなる」と云へば童は身を屈め再ひユツプに満たし、靜かに差し出して「伯父さんあなたのお口まで持て行きます、伯父さんは大層草臥ていらつしやる様に見えますから」と云ひつゝ杯をいだせしかば、旅人は亦も其水を飲み乾し、其飲む間も嬉しげなる童の容貌をうちまもり、「ほんとにお前さんは善き小さいサマリア人だ、サマリア人とは慈善の心厚かりし外國の人なり、細き事は聖書にあり、わたしはどうして此の恩がへしをする事が出来ませう、こんなにお前さんにお世話になつて」と有難さうに小供の好意を謝しつゝ、上着の下に隠れたる、小さい

カバンよりきらくしたる銀貨を取り出し、たりに童  
は逡巡して、「ア、伯父さん左様な事をして下さりませ、な、  
母は私に此杯は價值のないものだ」と申されました。伯父  
さん私の家は貧しく御座りますけれど、神様は大層恩ん  
で下されます、私共の家は右にある岩の下から流れ出る  
美しい泉は、神様の賜物ですから、母が常々私に此恩を  
よく記憶へて、聖書にある通り價なしに受けたのですか  
ら、又價なしに與へねばならぬと申しました。其れですも  
のどうして金などが戴たかれませう、伯父さんが御覽な  
さる通り、此杯は愛の勸勞をする杯です、これを満たして

あなたの様に疲勞れ渴て居る人たちに、分與へなければ  
ならぬのです、此コップを見て下され、其上にはいつぞや  
母が書て置て下された言葉があります、と童はコップを  
旅人に渡し、已は石の上に置きし水器を取り上げ、残りし  
水を馬に飲ませ、水器は空になりけるが、僮童は布巾もて  
旅人の上衣を拂ひつゝ、亦もや伯父さん、母が針か何かで  
私が忘れぬ様にとて書て置て下された言葉が讀ました  
か、と問ひしに旅人は、「ハイ讀ました、キリストの名の爲に  
常に喜んで、如何なる愛の働をもなさんと書てあるが、お  
前さん此の泉の水がいつか涸れてしもう事があるとは



でもモ一ツ(童子漸く考へ出して)好機會とか云ふコップを以て居る」と申しました、私には未だ其意味が充分にわかりません、大きくなればキツト解ると母が申しました、併し其コップはいつでも折さへあれば親切な言葉を以て満たすことが出来る」と云ふ意味に違ひありません、母が申すには人が悲しんで居るときには慰さめたり小き事でも何んでも仕て人を幸にして上げると云ふ事だと申されました、又わたし共がどんなに貧乏でも、其コップを持つことが出来るのです、ほんとに私は此のコップに附てある裝飾の玉の話聞くことが好てたまりませ

ん、なぜと申すに其の寶玉には一々名があると云ふことです、ものけれども其玉はどんなに光つて居ても私共の肉眼には見へないさうです、其の寶玉と云ふのは母が聖書の何處かで讀んだ寶玉とは違ひます、なぜなれば其杯の周圍に附て居るのは忍耐、禮儀、寛容、信仰、眞實、快樂、尊敬、親切、克己とか云ふのです、さうして其中で一番大きな玉は愛と云ふのださうです、私も成人になつたらば此名の意味がよく分る様になりませう。こんな此コップには幾つも寶玉が附て居ても、もし此の寶玉を愛しますれば、コップはちつとも重くならず、さうして神様は此コップ



に入れるものを誰にも下さるさうですけれど一人も同  
 じなのは無いと母が申しました、嗚伯父さんも神様から  
 善いのおももらいなさったでせう、童は旅人の塵にまみ  
 れたる外套を打拂ひて、後己が持ちしユツプを差し上で、  
 愛らしげにユツプを撫てつゝ云へる様、伯父さん皆様の  
 持つて居るユツプは大層美しいのですと、母は申しまし  
 たけれど私は自分のが一番好きです、私のは手に取て水  
 を汲むだり、腰にさけたり其處らへ懸たりする事が出来  
 ますけれど、他の人ののは決して見る事が出来ないのです  
 もの。伯父さん他のは何處に懸て居るでせう、私には見ま

せんけれど母が申しましたから眞には違ひありません、  
 と云へる時童の顔は輝きて、不思議なる事實を案し出し  
 たるが如く見えたりとぞ童再び旅人に問へる様、伯父さ  
 ん其杯は何處に懸て居るとお思ひなさる母さんが申しさ  
 れますには、人の心の中に懸て居るのですと、なんと不思  
 儀ぢやありませんか、時に旅人は一言の答をもなさず、起  
 ち上りて、小路を横ぎり山上より下の方を遠近と眺むる  
 うち、彼方の一樹の梢の上より、薄き煙の登り立つを見出  
 しければ振り返りて童に問へるやう、ユレ、お前さんの家  
 はあの樹の上から煙の出で居る處かい。時に童は既にユ

ツプをしかと腰に結び付け、旅人の間を待ち受け居りし處なれば、旅人の傍に近よりつゝ直に答へて「ハイ左様ですあの煙は母が晝飯の仕度に汗を煮て居るのでせう、今朝私は此のユツプをもつて出ましたから、私と一處に晝を食べるのを楽しみに待ち受て居るのです。伯父さん此處から右へ右へと行きなされば、一つの谷へ出ます。其からは危い事はありません。伯父さんは私の家の方へ来なさいますか、もし私の家へきて下されば汁も澤山こしらへてありませう。旅人は可愛さのあまり、童を抱き上げて鞍の上に乗せ、己は傍に立ち、童に語れる様、「ユレサ私の

愛する子よ、今わたしに一言を約束して下され、今夜御母上と祈禱をなさる時、神様に今日お前さんが、小さき手と心とで愛らしくユツプを充たしなされた様に、わたしも愛の働と云ふユツプを充たす事の出来るやう、私の爲に神の助を祈て下され、わたしは此から遠國へ用事があつて行くのですが、お前さんの其の可愛らしい顔を斷ず思ひ出させせう。さうして若し生命ありて歸る事が出来たら、又々此山路をたどつて来て、お前さんの愛らしいユツプから冷き水を飯ましてもらひませう、斯くて旅人は童を馬よりおろし、急ぎその家に歸る様すゝめければ、童は

莞爾として會釋したまふ急ぎ歸途に就きにけり。旅人は馬に跨り道すがら何か考へつゝ乗り行き獨言して「嗚呼忠誠なる愛らしき小き靈よ、實に神の眞實なる僕なるかな。わが世塵に染みたる心にては彼の如く小き泉をも天の賜物と論る事能はずといへど、我が高慢と私慾は強く誡められぬ。かの幼き童は例令凡の所有物を取り去らるゝとも尙彼處に佇みて路頭に迷ふ人々に路を示すならん。又母が此く此く云へはとて母の言葉に何事も委ぬる信用の清けさ嗚呼余も同じくユツプをもちながら一度も一杯の水を人に與へし事なく屢好機會を得たれども

人を助けし事もなく溢るゝまでに受けし恩を、未だ一度も人に分配せし事もなく童が語りし寶石も心の中に有てるや否、余は時も貨財も才能も皆酒に耽りて費せり余は何如にして神より余に托せられたる資本を償ふとを得んと。旅人が童に逢ひしは此が最後となりにけり其後烈しき戦争起りて其國は兵馬の蹂躪する所となりければ三年の星霜を経て後旅人が再び此の荒き山路をたどりて歸るさ親切なる山賤に童の在處を尋ねしに其地が恐ろしき戰場となりしとき人々の隱家と頼みし所も殘忍なる敵兵等の襲ふ所となりしかば彼の幼き童は小鳥

の飛ぶが如く彼のこのさ杯は以て清き水を泉より汲みては  
 與へ與へては汲み大膽にも負傷せし人々の間を往來し  
 て幾人の渴きし口を濡せしが或時日將に西山に没せん  
 とする頃今にも息の絶えんとする一人の兵卒に水を與  
 へんとする折柄何處よりかは知らねども飛び來りし彈  
 丸にこのこ心臓を打ち貫かれ長く愛せしコップも眞二つ  
 に割られたり其夜兵卒等はその死骸をば近傍の林の中  
 へ携へ行き其處に一ツの墓場を掘り其中の大將とも思  
 ほしき人己が腕にてこのこ死躰を抱きつゝ着せし肩衣以  
 て童の身を纏ひ假りに埋葬したりと聞けり又山賤の云

へるには人々の語るを聞けば童を葬りし時彼が爲に歎  
 げし祈としては只人々の泣聲のみなりしと余輩はあの母  
 子を慕ひて止まざれど彼等と分かるゝは今暫しのみ母  
 子の愛らしく優しき所業は幾何ばかりか我等に益を與  
 へしぞ見れば君も亦童の親しき顔を忘れ給はざる一人  
 ならん童は存命中自己の事としては露塵も顧みず非命の  
 死を逐げし數日前の事なりしが其家に使者と思ほしき  
 者主人の命なりとて一個の箱を持ち來り又その使者の  
 口上には主人は遠國に在らせらるゝが我に命じて彼の  
 谷に行きもし一人の幼き童を見當らば此れは過し日受

し恩の印なりとて、渡せよと云ひたまひぬと。その後童は贈られし物なりとて、余に靴下帽子上着、又母にとて、金入其他種々のものを見せしが、その時童の喜悅満面に溢れたり又童の云へるには、エンプロースさん(山賤の名)私は此色々の物を贈て呉れた人を知て居ます、其人は必定復此の路に歸て來ると云ひました、そうして私がサヨイナラと云つて別れた時、其人の頬に涙が流れてゐました、又其使の話には、其人は近い中に歸て來るといふ事ゆゑ、此度遇ふ時には此もらつた物を身軀につけて居なければなりません。母様も私も毎晩神様に祈るときあの人が無

事に歸て來る様に祈て居ますあの方は私が水一杯あげた丈でこんな親切なのですもの私は其人にお禮を云ふ仕度をしなければなりませんと旅人は此を聞き、悲歎失望やる方なく乗りたる馬の鬣に顔打伏せて愁傷し、なかくに堪えがたき感情を蔽さんともなさゞりけり傍に立ちし山人は縁故なき人とは知りたれど、彼が悲歎に感激しあらくれたれど正直なる手もて旅人の手を握り、云ひけるは旅のお人よ彼の一杯の水こそは神がおん手づから君が心の荒れたる島を濕し給ひ、年經るとともに湧き出で清き泉となり、それより愛の流れ溢れて幾多の

人に慰と助を與へしめんとて賜はりしものに相違なし。何故かく申すかとなれば、我は日頃此山奥に住むものなれど、實地の經驗より我等の才能にまれ心にまれ、凡て神の賜物にして、我等は此の賜物を他人に分配する爲の家宰とせられたりと諭りたり、其れ故神の恩の賜物を此の幼き童の如く喜びて人に分つに於ては貧者と富人のけぢめなしと。

此く山賤と旅人の二人、其事情境遇は異なれど、共に同じく、逝にし潔き童を思ひ、手に手を取りて同情を表しぬ。此二人の出會しことは後再びあらざりしが、其後その旅人

は長く此世に生存て屢々辛き困難、強き誘惑に遇ひたれど、皆此等に打勝ちて、キリストの忠僕、勇將として、その一生を送りけるとぞ。其後彼が秘藏の寶物の中に見出されたるは、彫刻せし一ツの箱にて、其内部には岩の下を泉の流るゝ處を描き、其周圍には、水器とユツプを畫き、又其表面には、「キリストの御名の爲、常に愛の働をなさん」と記し裏面には白地の上に青と金にて

「幼き小供、彼等を導かん」と書してありしとぞ。

明治廿六年五月十三日印刷

同 年五月十六日發行

同 廿八年四月十五日

同 廿八年四月十八日

版權  
所有

發行者

福永文之助

東京新橋出雲町一番地

印刷者

高田乙三

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

警醒社書店

東京新橋出雲町一番地

賣捌所

福音舍

大坂西區土佐堀三丁目

印刷所

秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

松村介石著

○人物論

定價二十錢

斯書 孔子 横井小楠 大塩平八郎 ロベルトソン

等が人物を擧げ來り何如に彼等が 天道に安んじ人情に動きたるかを説き去るに今日の青年を指導

○今年後の覺悟

松村介石合著 近刻 定價二十錢

附錄近世大戰始末

○亞米五傑傳記物語

渡邊千秋 武田昌武 譯字 近刻 全六十二錢

○武談

戸川殘花著 全六錢

○地理學考

内村鑑三著 全三十五錢

○新英語學

内村達三郎編 全四十錢

○日本國民之教育

渡瀬常吉著 全二十二錢



○五	立	志	之	礎	松村介石著	全	郵定	無	二	五	錢
○再	テ	ビ	テ	ナ	松村介石著	全	郵定	無	十	五	錢
○三	學	生	の	囊	松村介石著	全	郵定	無	七	錢	
○我	黨	の	德	育	全	郵定	無	二	四	錢	
○三	倫	古	龍	全	郵定	無	四	廿	錢		
○ユ	ロ	ム	ス	傳	内村鑑三著	全	郵定	無	四	六	錢
○再	ワ	シ	ン	傳	漢北生著	全	郵定	無	二	八	錢
○博	愛	美	談	浮田和民譯	全	郵定	無	六	三	錢	
○慈	善	美	談	水野忠九譯	全	郵定	無	四	廿	錢	
○婦	人	立	志	編	竹越竹代著	全	郵定	無	四	十	錢

○ヘ	ン	リ	ー	マ	ル	チ	ン	傳	丹羽清次郎譯	全	郵定	無	六	錢
○ピ	ー	チ	ヤ	ル	傳	松村介石譯	全	郵定	無	六	錢			
○太	關	王	傳	山形雄三藏著	全	郵定	無	四	五	錢				
○新	島	先	生	傳	ラヒス著	全	郵定	無	三	十	錢			
○新	島	言	行	錄	石塚正治編	全	郵定	無	四	十	錢			
○鳥	留	好	語	不知庵主人譯	全	郵定	無	二	五	錢				
○眞	如	の	月	語	松居松葉著	全	郵定	無	十	二	錢			
○再	愛	の	杯	佐藤てつ譯	全	郵定	無	三	錢					
○印	度	物	語	大島正健譯	全	郵定	無	一	七	錢				
○あ	り	ふ	れ	物	同	全	郵定	無	十	二	錢			
○祝	ひ	歌	語	若松賤子譯	全	郵定	無	二	十	錢				
○世	を	渡	る	風	香雨女史譯	全	郵定	無	二	十	錢			

○世界周遊記	○日本の道德と基督教	○基督教及社會	○全及哲學	○全及佛敎	○基督教と條約改正	○基督教及儒敎本分論	○基督教と國家	○宗教上の革新	○敎教新論	○宗敎哲學	○思想の哲學
星野光多著	藤田時雄合著	警醒社書店編輯	池本吉次編	向	内村達三郎著	櫻井成明譯	小崎弘道著	横井時雄著	小崎弘道著	ラッソ著	星野光多著
定價三十錢	定價四十錢	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
四	八	十五	十五	十五	八	四	六	六	十八	二十二	四十

○談	○大家說	○道の禁	○函嶺講	○須磨講	○聖語一覽	○信徒のなぐさめ	○信仰の道	○信仰の理由	○眞理一斑	○我邦の基督教問題
星野光多著	三上合譯	戸川殘花譯	白	白	星野光多著	内村鑑三著	松村介石著	小崎弘道著	植村正久著	横井時雄著
定價五十錢	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
五	三十	十	廿五	廿五	十五	二十	七	二十五	二十	二十八



The Cup of Loving Service

特15  
754  
1385

の  
さ  
か  
づ  
き

020205-001-9

特15-754

愛のさかづき

佐藤 てつ/訳

2版

M28

ABI-0004



元發店書社醒警